平成２１年度学生支援プロジェクト事業成果報告書

超高齢社会への準備

～特別養護老人ホームへのボランティア

代表者　髙木世理奈（法学部法学科３年）

１．目的と概要

現在の日本は超高齢化社会を迎え、今後においても高齢者の数は増え続けることが予測されています。それに応じて社会福祉への関心も高まる傾向であると思われます。このプロジェクト事業では、このような現状を踏まえ、今まで各自でそれぞれに身につけた社会福祉やボランティア活動に関する知識をメンバー全員で共有し、養護老人ホームでのボランティアに活かし、より一層、理解を深めることを目的としています。

２．実施期間（実施日）

平成２１年５月１３日から平成２２年１月２７日

３．成果の内容及びその分析・評価等

主な活動内容については、毎週水曜日の午後、高松市宮脇町にある「社会福祉法人さぬき」が運営する養護老人ホームを訪問し、入所者の方々と会話をしたり、一緒に行事の準備をしたり、売店の手伝いをするなど、様々なことに取り組んできました。活動を始めた当初は、年代の違う入所者の方々と会話をするきっかけを作ることが難しく、さらに、会話をしながらも周囲の方々の様子にも気を配らなければならないので、戸惑うことが多く、上手く立ち回ることができませんでした。しかし回数を重ねるごとに待ちの姿勢ではなく、困っている入所者の方がいれば自ら声をかけ、積極的に行動してサポートできるようになりました。また、売店の手伝いにおいては入所者の方々にわかりやすいように商品の値段を書いたり、商品を並べたり、レジの打ち方を教えてもらいながら実際にレジを打ってました。さらに、行事の手伝いでは七夕などのレクリエーションが行われる場合には、一緒に折り紙を折ったり、飾り付けを作ったりというようなお手伝いをさせていただきました。

その他には、施設の掃除や喫茶のお手伝いもしました。平成２１年１１月には、プロジェクトメンバーが主体となってハロウィンパーティーを開催しまし

た。内容は紙芝居を二作読み、最後に室内でできる打ち上げ花火を上げ、多くの入所者の方々に楽しんでいただくことができました。

しかし、メンバー全員が３年生ということで就職活動を行う都合上、平成２２年に入ってからはメンバー全員でボランティア活動を行うことが困難になりました。そのため、平成２２年１月２７日を最後に、このプロジェクトを終了することになりました。今後においてもこのプロジェクトを通して学んだことを活かしつつ、各人が個別にボランティア活動を行う予定です。

次に経費の用途ですが、昨年と同様、メンバー全員のエプロンと上履きの購入に使用しました。これは、全員が同じ物を使うことで、入所者の方々に「香川大学の学生が訪問している」と認識して頂くためのユニフォームのような役割を期待したからです。スーツやなどのきっちりとした服装で訪問した場合、動きにくい上に、入所者の方々に緊張感を与えたりします。また、入所者の方々にとっては家であるホームに他人が入るという印象さえも与えかねないので、今回もエプロンを選びました。全員が同じエプロンを着用することで入所者の方からそのことを指摘され、会話のきっかけにできたので、この試みは予想以上の成功と感じることができました。

４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

高齢者ボランティアは、ホームボランティアの申し込みをする必要があるという点、そして、少しの不注意で高齢者の方々の命を危険にさらしてしまう可能性があるという点から、気楽に参加できるボランティアとはタイプが違います。このような現状をふまえると、このプロジェクトは高齢者ボランティアに興味を持っていた人にとって、入り口を開く役割を果たせたのではないかと考えています。このプロジェクトにおいては、ボランティアを始める前にメンバー全員がボランティア保険に加入し、施設の職員の方から注意事項を教えていただいた上でボランティアを行いました。これらの点を守ることによって、プロジェクトメンバーと職員・入所者の方々とのつながりや、香川大学と「さぬき」という養護老人ホームとのつながりを築くことができたと感じています。今後、このつながりが、プロジェクトメンバーがそれぞれにボランティアを行う場合や、新たに高齢者ボランティアに興味を持った人にとって、大きな意味を持つものとなるでしょう。

５．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

活動全体を通して感じたのは、世代の異なる入所者の方々とコミュニケーションをとることはとても難しい、ということです。前年度、このプロジェクトを行った先輩方や職員の方からアドバイスをいただきましたが、会話がなかな

か上手くいかずに落ち込んだり、会話のきっかけをどのようにつかめばいいのかと悩んだりすることもありました。しかし、世代の異なる方とのコミュニケーション能力は、今後、就職活動を行う際や、社会に出て働く際にも重要な能力だと考えます。就職活動を目前にした時期に、コミュニケーションをとることの大切さ、難しさを再認識できたこと、そして、自分に足りないものは何かということについて考えられたことは、とても貴重な体験となりました。

ボランティアでは、車椅子の扱い方や車椅子を動かす際の注意点を職員の方からご指導いただき、実際に車椅子に乗った方の移動のお手伝いをすることもありましたが、車椅子に乗っている方にとっては、私たちの何気ない行動に不安を感じることがあるということを教えていただきました。このとき、ただ闇雲に気を配るのではなく、適切なとき・適切なところへ適切な配慮をすることが求められているのだということを学びました。

このプロジェクトを通して学んだこと・気づいたことは、高齢者の方に対してだけでなく、どのような世代の人と接するときにも大切なことばかりだと考えています。大学生活の中で、同年代の友人たちと接しているだけでは気づけなかっただろう多くのことに気づくことができました。そして、プロジェクトメンバーがこのプロジェクト以外のボランティアにも積極的に参加するといった変化もみられており、これらのことからも「各人が持っている知識をメンバー全員が共有し、このプロジェクトに役立てながらさらに知識を深める」という目的が達成できたと考えています。

６．反省点・今後の抱負（計画）・感想等

当プロジェクトは今年度で５年目を迎え、法学部内での認知度はかなり高まってきています。参加者の人数も前年度よりも増加しました。しかし毎年の課題である「参加者の限定」という問題はなかなか解決することが難しいです。実施メンバーが継続的にボランティア活動を行うのでどうしても継続が難しい人にとって参加しにくい雰囲気を作りがちではないかと考えられます。今後とも、継続が難しい人が気軽に参加できるような雰囲気作りや呼びかけを行い、参加者を積極的に募集する必要があると感じました。

しかしその反面、メンバー全員が継続的にボランティアに参加することが可能であれば団結しやすいとも感じられました。平成２１年１１月に行ったハロウィンパーティーは１ヶ月以上前から企画し、準備も協力して行うことができました。入所者の方とのコミュニケーションに苦戦していたメンバー一同は、積極的に話しかけ、困っている人がいればサポートするといった周囲への気配りができ、それぞれが大きく成長できたと感じてます。

次に当初の目標である「地域ボランティアセンター香川大学支部」の設立が

できなかったことも反省点の一つです。この「ボランティアセンター」とは、既存のボランティアと異なり、香川大学内のボランティアグループや香川県内の大学のボランティアグループと連携を図ることを目的としています。設立に向け、既存のボランティアセンターを見学するなどの準備はしていたものの、実行に移せなかったことが残念です。見通しの甘さと支部設立に必要な知識の不足が原因だと考えています。来年度以降、支部設立に向けて実績を積み重ねていきたいです。

最後になりますが、この度は当プロジェクトにご支援下さり、本当にありがとうございました。

７．実施メンバー

代表者　髙木世理奈（法学部３年）

構成員　明石　千香（法学部３年）　筒井　啓太（法学部３年）
古林　昌子（法学部３年）　藤沢　美希（法学部３年）
小森　郁子（法学部３年）　細田　貴裕（法学部３年）
佐古　真之（法学部３年）　宮武　由貴（法学部３年）
佐野　　窓（法学部３年）　室江　美穂（法学部３年）